

「福音を伝えるために主が私を派遣した」 ——イザヤ書 61 章における共同体再建の理念——

小 友 聡

問題の設定

「福音を伝えるために主が私を派遣した」。イザヤ書 61 章 1 節の言葉である。いわゆる第三イザヤに属するこの言葉は、新約聖書ではルカ福音書 4 章 18 節に引用されている¹⁾。主イエスがガリラヤでの宣教を開始した時に、ナザレの会堂で朗読された言葉だ。主イエスはこの預言者イザヤの言葉が「今日、実現した」と宣言した。主イエスが会堂でこのイザヤ書 61 章 1 節に目を留めたことは、福音書記者ルカの恣意的な解釈による引用と説明されることが多い。すなわち、主イエスのメシア性を根拠づけるために預言者イザヤの召命の言葉が解釈を加えられて引用されたのだと説明されるのである²⁾。なるほど、ルカはイザヤ書 61 章 1 節を強烈な救済論的メシア預言の言葉として解釈しているかに見える。しかし、果たしてそれだけの意味であろうか。ルカの福音書記述の冒頭 (1 章 1-4 節) においては、ルカの信仰共同体の正統性を弁護しようとの意図が明瞭に読み取れる³⁾。その共同体意識がルカのイザヤ書からの引用に何ほどか関係してはいないだろうか。ここで、我々の関心はイザヤ書に移る。そもそも、イザヤ書 61 章 1 節の言葉は、イザヤ書そのものの文脈ではどういう意味を有しているのだろうか。今日、旧約聖書学においても、第三イザヤあるいはイザヤ書全体の文脈で 61 章 1 節の本来的な意味を把握することには必ずしも成功していないと思われる。我々の研究の動機はここにある。我々の目的は、イザヤ書 61 章の内容を明らかにした上で、この 1 節の言葉の意味を抉り出すことにある。

それは、ルカ福音書 4 章 18 節における引用の意味を従来の解釈とは全く異なったものにする可能性がある。

1. イザヤ書 61 章 1-11 節

ヘブライ語テキストからの翻訳は以下の通りである。

1 節 わが主ヤハウエの霊が私の上に。ヤハウエが油を注いだからだ⁴⁾、私に。

主が私を派遣した、弱りきった人々⁵⁾に福音を伝えるために⁶⁾。

すなわち、心を打ちひしがれた人々を癒し、捕らわれた人々に自由を告げ、

繋がれた人々に解放を⁷⁾（告げるために）。

2 節 ヤハウエによる恵みの年⁸⁾、我々の神による報いの日を告げるために⁹⁾、

すべて悲しむ人々を慰めるために。

3 節 シオンを悲しむ人々を堅く立たせて、彼らには灰に替えて冠を与え、悲しみに替えて喜びの油を、弱り果てた霊に替えて賛美の衣を（与えるために）。

そして彼らは義の樅木と呼ばれ、冠としてヤハウエが植えたもの（と呼ばれる）。

4 節 すなわち、彼らはかつての廃墟を再建し、いにしえの荒廃を建て直し、廃墟の町々を再興し、代々の荒廃を（再興する）。

5 節 異邦人は立ち、またあなたがたの羊を飼う。

他国の人々はあなたがたの畑の耕作者、またあなたがたの葡萄畑の労働者となる。

6 節 しかし、あなたがたはヤハウエの祭司たちと呼ばれ、我々の神の従者たちと称される。

あなたがたは国々の富を享受し、その栄光をわが物とする¹⁰⁾。

- 7 節 あなたがたの受けた恥の替わりに（彼らの恥は）二倍（となり）、
また（その）恥辱を彼らは分け前としてほめたたえる¹¹⁾。

「それゆえに、彼らはその地で二倍を受け継ぎ、永遠の喜びが彼らにある。

- 8 節 なぜなら、私ヤハウエは正義を愛し、捧げ物の強奪を憎むからだ。
そして私は真実をもって彼らの業に報い、永遠の契約を彼らと結ぶ。

- 9 節 彼らの子孫はその国々に知られ、彼らの子らはその諸民族に（知られる）。

すべて彼らを見る者は認めるであろう、
彼らこそヤハウエの祝福した子孫だと」¹²⁾。

- 10 節 私はヤハウエによって大いに喜び、私の魂は私の神によって踊る。
なぜなら、神は救いの衣を私に着せ、義の晴れ着を私にまとわせるからだ。

神は花婿のように冠をかぶり¹³⁾、そして花嫁のように彼女は飾りを身につける。

- 11 節 なぜなら、大地がその芽を萌えいでさせ、また園がその種を芽生えさせるように、
わが主ヤハウエはすべての民族の前で義と賛美を芽生えさせるからである。

2. テキストの統一性について

イザヤ書 61 章は、複雑に入り組んだテキストのような印象を受ける。まず人称が一貫していない。1 節から 4 節までは一人称と三人称で表現されるが、5 節から 7 節にかけて二人称複数となり、8 節以下は再び一人称と三人称で表現される。しかも、8 節の「私」はヤハウエであるが、10 節「私」はヤハウエではない。文体だけでなく内容においても一貫したものを見るのは難しい。預言者の

召命を記すと思われる 1-3 節のあと、突然、廃墟の再建について記され、さらに続くのは、預言者の召命とは全く異なるイスラエルの繁栄に関する記述だからである。

実際、このテキストの統一性を支持する学者は少ない。典型的なのはヴェスターマンである。彼は、5 節と 6 節が二人称の呼びかけであって文脈からはみ出ているとみなし、従ってあとから挿入されたものだと判断する¹⁴⁾。さらに、ヴェスターマンは 10 節と 11 節の入れ替えを提案する¹⁵⁾。10 節が頌栄であって、最後に置くのがふさわしいと判断するからである¹⁶⁾。

このヴェスターマン説を検討しておこう。彼は 5-6 節が二人称の呼びかけであって文脈からはみ出ると見るが、しかし原文では次の 7 節にも二人称表現が存在し、6 節と 7 節は文体上つながっている。ヴェスターマンは辻褄を合わせるために 7 節の二人称表現を三人称に読み替えているが¹⁷⁾、これは本文批評上、支持することはできない。内容的に見ても、6 節の「その（国々の）栄光をわが物とする」という表現は立場の逆転をほのめかし、7 節以降の「恥辱に替えて祝福を得る」というモチーフにつながっている。従って、6 節と 7 節は本来的に続いていると見たほうがよい。もっとも、5 節が突然、二人称表現になるが、この文体上の変化は文体的混乱を意味するものではなく、表現上の技法として説明可能である（これについてはあとで論じる）。要するに、5-6 節を文脈上異質なものとみなす必要はない。10 節と 11 節の入れ替えについてはどうだろうか。これについては、写本や古代語訳に支持するものがない以上、支持するわけにはいかない。テキストを操作すれば説明しやすいということは、テキストが本来そうであったということの証明とはならない。いずれにせよ、ヴェスターマン説は説得的だとは言いがたいのである。

それでは、61 章は全体として統一性を有すると言えるだろうか。最終的な結論を留保した上で、テキストを 1-4 節、5-9 節、10-11 節の三つに区分して文体的、内容的な分析を試みる。まず、1-4 節である。

1-4 節を第一区分とすることについては議論が必要である。多くの学者が 1-3 節をひとまとまりと見るからである¹⁸⁾。その場合の根拠は、1-3 節は一人称

と三人称の文体で表現され、しかも内容的に一貫しているという判断である。「私」を名乗る預言者にヤハウエが油を注ぎ、派遣した（1節）。その派遣の目的が最初に「弱りきった人々に福音を伝えるため」と表現される。それを敷衍するように、そのあと3節の終わりまで次々と慰めに満ちた派遣の目的が告げられる。ところが、4節には「彼らは廃墟を再建する」という表現が現れ、廃墟の復興について関心が記される。3節まで「廃墟」については一度も触れられなかったのに、4節でそれが語られるのは確かに唐突であり、いささか奇妙である。そこで4節を切り離し、3節までを区切りとする見方が一応は成り立つ。

しかし、4節冒頭の動詞 **בנו** の主語は三人称複数であり、これは直前の3節の代名詞 **הם** 「彼ら」を指すのは明瞭である。それだけではない。4節の **בנו** 「再建する」が3節の **ששון** 「喜び」と結びつくとするれば、62章5節と内容的に一致する。そこでも「再建する」は「喜び」と結びついているからである。61章3節には「シオン」（エルサレム）という言葉がある以上、4節における「再建」はエルサレムの再建を意味するのであって、この「再建」モチーフが1-3節の喜ばしい福音告知の内容と密接な関連を持つと考えることは十分可能である。従って、61章の第一区分は1-3節ではなく、むしろ1-4節と見る方が適切である¹⁹⁾。

第二区分は5-9節である。5節から7節にかけて二人称複数の呼びかけで記されていることはすでに指摘した。問題は7節から9節へのつながりである。8節と9節には二人称の呼びかけはない。それどころか、8節には **אני** 「私」という一人称表現が出てくる。これはヤハウエを指す。この「私」は1節と10節の「私」とは区別されねばならない。1節と10節の「私」はヤハウエではなく、預言者自身を指すからである。そこで、8-9節をヤハウエ自身の祝福の言葉と理解し、ここを引用文として解釈することができる²⁰⁾。これは人称の交錯を説明する一つの可能性である。ただし、その場合に7節が問題となる。7節は、「あなたがたの受けた恥」と二人称で表現され、そのあと三人称で「彼らはほめたたえる」と表現されるからである。これは厄介な問題である。関根訳は7節の「あなたがた」を「彼ら」と読み替えて矛盾を切り抜ける²¹⁾。しかし、これ

を支持する写本も古代語訳もない。

5-9 節を内容的に考えてみよう。5-6 節の「あなたがた」はイスラエルを指す。7 節の「あなたがた」も同様である。その「あなたがた」に仕える者となるのが「異邦人」「他国の人々」である。つまり、今や立場が逆転して、イスラエルが恥をすすがれ、他国の人々が恥を受ける、ということが 5-6 節の内容である。これは 2 節の「我々の神による報いの日」を内容的に説明するものである。このような立場の逆転を考えるならば、7 節最初の名詞文は「あなたがたの受けた恥の替わりに（彼らの恥は）二倍（となる）」と訳することができる。そのあと、「（その）恥辱を彼らは分け前としてほめたたえる」と続く。これは皮肉の混じった表現だが、イスラエルと他国人との立場の逆転を考えるならば、字義的に十分理解可能である。7 節後半の「それゆえに」以下は 8-9 節のヤハウエの言葉に含めて理解する。8-9 節でヤハウエが祝福をもって語る「彼ら」とはイスラエルであって、それは 7 節後半の「彼らはその地で二倍を受け継ぎ、永遠の喜びが彼らにある」と内容的にも直結するからである。

第三区分は 10-11 節である。この二つの節では「私」とヤハウエが際立ち、節同士のつながりを有することは疑いない。10 節と 11 節を入れ替える必要はない。預言者自身がヤハウエを賛美する頌栄がこの内容である。預言者が「私」として登場するのは 1 節も同じであって、内容的にも関連をほのめかす²²⁾。

以上の分析から次のようにまとめることができる。61 章は 1-4 節で預言者の召命、5-9 節でシオンの回復、10-11 節で賛美が語られる。これら三つの区分には相互に関連する文体と内容があり、何らかの統一性を予想することができる。

3. テキストの構成

61 章はどのような構成を有するだろうか。まず、注目したいのは、三つの区分の構成である。第一区分の 1-4 節は、一人称で語りかける預言者と三人称のヤハウエの名が際立つ。しかも、1 節冒頭では主語はヤハウエであり、「私」はヤハウエの派遣の対象である。即ち、第一区分で明瞭なのは、「ヤハウエ」（主

語) — 「私」(目的) という関係である。それでは、第三区分の 10-11 節はどうだろうか。10-11 節でもやはり一人称で語りかける預言者と三人称のヤハウエの名が際立つ。その場合、10 節で主語は「私」であり、ヤハウエは賛美の対象となっている。即ち、第三区分では、「私」(主語) — 「ヤハウエ」(目的) という関係になる。これは極めて意味ある対照性を示す。1-4 節ではヤハウエが預言者を召し出し、福音を伝えるために派遣するといういわば「上から下へ」の方向性が見られる。それに対して、10-11 節は、預言者がヤハウエを喜び、賛美するという「下から上へ」の方向性である。これは偶然とは思えない。10-11 節の賛美はもともと 1-4 節の召命に対する応答として意図的に配置されているのではないだろうか。

それならば、第二区分の 5-9 節はテキスト全体の構成上どういう意味を有するだろうか。その前に、第二区分の人称の不統一について説明をしておこう。5-7 節に二人称表現が出てくことは奇妙な印象を与える。この「あなたがた」とはヤハウエでも預言者でもなく、イスラエルを指すと判断できる。5 節で「ヤハウエの祭司たち」と呼ばれているからだ。それでは、誰がイスラエルに「あなたがた」と語りかけているのだろうか。第一区分と第三区分が共に「ヤハウエ」と「私」(預言者自身) による対話の形式で表現されるのに対し、第二区分は「ヤハウエ」と「預言者」とは別である匿名の人物の存在を予想させる。しかも、6 節では「我々」と表現され、この匿名の人物が複数であることをほのめかす。7 節後半から 9 節がヤハウエの言葉とすれば、匿名の人物(集団)にはヤハウエ自身が直接に関与しているともいえる。

5-9 節を説明するためには、いわゆる「ヤハウエの議会」という表象を用いることが有効と思われる²³⁾。これは神話的な表象ではあるが、旧約にしばしば見られるものである²⁴⁾。旧約では、ヤハウエが重要な決断をする場面でこの表象が用いられる。注目すべきことに、この表象はイザヤ書においても指摘できる。まず特徴的なのは 6 章 1-12 節だ。預言者イザヤは召命の際に「誰が我々のために行くのか」というヤハウエの問いかけを聞く(8 節)。これはヤハウエが天の万軍に対して問うた言葉である。「我々」という複数形においてヤハウエ

の議会が表象されている²⁵⁾。第二イザヤには「ヤハウエの議会」が顕著に見出される²⁶⁾。40章1-8節がそれにあてはまる。「私の民を慰めよ、慰めよ」とヤハウエは命じるが、これは天の議会でヤハウエがその使者たちに語りかける状況を説明する²⁷⁾。イザヤ書6章1-12節も40章1-8節も共に預言者の召命を記す箇所である。ヤハウエが預言者の派遣を決断する重要な箇所だ。しかも、そこでは「神の民」への派遣ということが決定的に重要な問題である(6章9節, 40章1節)²⁸⁾。それでは、イザヤ書61章の場合はどうであろうか。ここには、預言者の召命が記され、ヤハウエが派遣の決定をし、神の民への派遣が関心事である。その限りにおいて、61章においても「ヤハウエの議会」という表象が作用していると想定することは十分可能である²⁹⁾。

これによって61章5-9節に見られる人称の不統一が説明できる。つまり、61章の第二区分は、ヤハウエが天の議会において預言者の派遣という重要な意志決定をする場面であって、それゆえに人称が複数形の対話形式に転化すると考えられる。5-7節ではヤハウエの議会でイスラエルが呼びかけの対象になるが、使者として派遣される預言者がイスラエルと同一視されて呼びかけられていると見ることは可能である³⁰⁾。ヤハウエが預言者を派遣してイスラエルを祝福しようとの情熱が第二区分には顕著である。その内容は第一区分(1-4節)および第三区分(10-11節)と直接につながる。第二区分は61章全体の構成において固有の位置づけを持っているのである。

要約しよう。第一区分ではヤハウエが預言者を召し出す。第二区分では天において、イスラエル祝福という神の意志が宣言される。そして、第三区分では預言者がヤハウエを賛美するのである。このように理解する時、61章全体が均整のとれた構成をなしていることがわかる。第二区分はいわば間奏曲のように、預言者の召し(第一区分)と神への賛美(第三区分)をつないでいるのである。人称の変化はテキストの混乱を意味するのではなく、むしろ意図的に仕組まれた構成上の技法である。預言者の召命は間奏曲をはさんで神賛美で終わる。このように考えるならば、61章はひとつの祭儀的ドラマを構成しているともいえそうである³¹⁾。

4. テキストの意図と歴史的背景

イザヤ書 61 章が統一性を有するテキストだとすれば、ここで何が意図されているのだろうか。通常、61 章は預言者（第三イザヤ）の召命の箇所と理解される。その場合には文脈が無視され、1-3 節のみが摘出されて説明がなされる。なるほど 1-3 節だけを見れば、「弱りきった人々」に福音をもたらすため預言者が派遣される召命の記述と読める。その福音伝達の対象は「弱りきった人々」であり、また「心を打ちひしがれた人々」（1 節）、「捕らわれた人々」（1 節）、「繋がれた人々」（1 節）、「悲しむ人々」（2 節）である。このような表現のイメージから浮かび上がるのは不特定多数の貧しい民衆の姿かも知れない³²⁾。しかし、3 節にはすでに「シオンを悲しむ人々」という記述がなされている。シオンとはエルサレム、すなわち神殿のあった場所である³³⁾。4 節も「かつての廃墟」という表現で神殿をほのめかしている。61 章全体の文脈から見ると、福音伝達の対象は、不特定の民衆とは違った姿を映し出すのではなかろうか。

重要なのは 4 節である。そこには「彼らはかつての廃墟を再建し、いにしえの荒廃を建て直し」と記される。これが 3 節とつながっていることは明瞭である。3 節ではエルサレムの神殿の崩壊を悲しむ人々について語り、4 節では神殿の再建について記されている。そのように見ると、「弱りきった人々」、「心を打ちひしがれた人々」、「捕らわれた人々」、「繋がれた人々」、「悲しむ人々」と形容される人々は皆、エルサレム神殿の崩壊を嘆く人々と同一視して理解することが可能となる。「捕らわれた人々」を、バビロンにいる捕囚の民と特定する必要はない。あるいはまた、土地財産を失った債務奴隷³⁴⁾や獄中の犯罪者を想定する必要もない。8 節で「永遠の契約を結ぶ」³⁵⁾と約束される以上、この人人は神殿を失い異邦人の支配下にあるイスラエルの民全体を指しているのが自然である³⁶⁾。しかも、4 節では「再建する」という表現が繰り返し出てくる。6 節には「あなたがたはヤハウエの祭司たちと呼ばれ」と記される。祭司職は神殿と密接に関係する。神殿の存在によってはじめて祭司は役割を果たし、祭儀の執行が可能となる。その神殿再建の時がシオンに実現しようとして

いるのである。

預言者が伝達しようとする「福音」とは何か。それは神殿再建である。もし、イスラエルの民が神殿再建の良き知らせ（福音）を聞けば、どのようなことが起こるだろうか。民の悲しみと嘆きは一変するであろう。彼らにとって神殿再建こそが悲願だからだ³⁷⁾。その時、「心を打ちひしがれた人々」は癒され、「捕らわれた人々」は自由になり、「繋がれた人々」は解放される。「悲しむ人々」は慰められ³⁸⁾、悲しみは喜びに転じるのである（3 節）。ヤハウエはそのような民の祝福を宣言しておられる（5-9 節）。預言者はまさしくその福音を委ねられて大いに喜び、神を賛美して踊るのである（10-11 節）。

このように理解する時、イザヤ書 61 章全体は一貫した内容を有していると判断できる。紀元前 515 年のエルサレム神殿の再建を告知しているのは間違いのない³⁹⁾。神殿の再建は、イスラエルの民が失った民族的・宗教的アイデンティティを再獲得する決定的に重要な出来事である。61 章は一貫してこの歴史的出来事に関心を示す。最後に預言者が喜び踊るのは、預言者が召命を受けたからではない。神殿再建が今や実現するからである。

5. 共同体再建の理念

イザヤ書 61 章はエルサレム神殿の再建を告知することに関心がある。しかし、神殿再建への関心はイザヤ書ではこの 61 章に限ったことではない。直前の 60 章 13 節では「私の聖所」という表現で神殿がイメージされ、また直後の 62 章 9 節にも「聖所の庭」という表現が出てくる。62 章 5 節には神殿の再建が結婚を比喻にして印象的に表現されている。しばしば用いられる「城壁」（60 章 10 節、18 節、62 章 6 節）や「城門」（60 章 11 節、62 章 10 節）も神殿再建に直接にかかわる表現である⁴⁰⁾。60 章も 62 章も共にシオン（エルサレム）の再建について情熱を込めて語っていることは、その内容からして疑いない。この 60-62 章は第三イザヤ（イザヤ書 56-66 章）の中核をなす。これを囲むようにして、民の嘆きの記述があり（59 章 9-20 節、63 章 7 節-64 章 12 節）、さらに全体の枠組みとして 56-58 章と 65-66 章がある⁴¹⁾。このような構造から考える

と、61章は第三イザヤ全体の中心に位置することがわかる⁴²⁾。

その第三イザヤの中心においてエルサレム神殿の再建が大いなる喜びをもって告知されていることは極めて意味が深い。というのも、イザヤ書全体を見た場合に、やはり神殿の存在が重要な意味を持つからである。2章では、終末の幻として「主の神殿の山」がそびえ立ち、「神の家」に多くの民がこぞって礼拝に集まる。その幻に応答するかのように、イザヤ書最後の66章18節以下では「主の神殿」にすべての民が礼拝に集まるのである⁴³⁾。イザヤ書は神殿の記述から始まり、神殿の記述で終わる。イザヤ書はその全体の枠組みにおいてエルサレム神殿に強烈な関心を示す⁴⁴⁾。イザヤ書はイスラエルの民の枠を越えたすべての民族の救済についても語り⁴⁵⁾、あるいはまた祭儀批判にも言及するが⁴⁶⁾、イザヤ書全体の関心が神殿に集中していることは確かである⁴⁷⁾。イザヤ書をそのように読めるとするならば⁴⁸⁾、我々の考察が補強される。

61章は神殿の再建を主題とする。神殿再建とは祭儀（礼拝）共同体の再建である。捕囚期後、荒廃していたイスラエルが神殿再建により、祭儀共同体として復興するのである。それが61章の根幹にある思想的主題にほかならない。そうであるならば、1節の言葉もここから解釈されねばならない。「福音を伝えるために主が私を派遣した」。この言葉は預言者の個人的でカリスマティックな召命を告知すると理解されるべきではない。この言葉には、主御自身が祭儀共同体の再建を計ろうとし、またそれに応えようとする預言者の情熱が刻印されている。預言者は「福音」を伝えるために派遣されていく。それは、特定の弱者を救済するためではなく、主が祭儀共同体を再建するための派遣である。イザヤの「福音」とは徹頭徹尾、共同体再建に関わる。イザヤ書61章はその理念を示すことに集中しているのである。

6. 結論

イザヤ書61章は個人主義的救済（解放）に力点を置いているのではない。むしろ、共同体論という枠組み（理念）で「福音」を語っているのであって、それはイザヤ書全体についても言えることである。もし、そうであるならば、福

音書記者ルカは4章18節で、そのイザヤの理念を何らかの仕方で継承している
とは言えないだろうか。 (おとも・さとし)

注

- 1) ルカの引用はヘブライ語原文からではなく、基本的には LXX からの引用である。
- 2) J. A. サンダース (挽地訳) 「ルカ文書におけるイザヤ書」, 『インタープリテーション第15号』, 1992, 63-72 頁。
- 3) K. H. レングストルフ (泉・渋谷訳) 『ルカによる福音書』, 1976, 27-29 頁。
- 4) 「油を注ぐ」は字義通りに解するよりも、象徴的な表現と理解した方がよい。3 節で「油」は象徴的な意味で用いられているからである。C. ヴェスターマンは「ヤハウエが全権を委任した」と解釈している。C. ヴェスターマン (頓所・山本訳) 『イザヤ書 40-66 章』, 1997, 615 頁。ちなみに、ヤハウエが「油を注ぐ」のは旧約では常に王に対してである。
- 5) עניים 「弱りきった人々」は、語根 ענה から判断すると、必ずしも物質的に困窮した人たちという意味ではない。しかし LXX は「貧しい人々」と訳したため、その訳が一般化した。Vgl. R. Martin-Achard, Art. ענה, in: THAT II, 1984, 341-350.
- 6) בשר 「福音を伝える」は、良い知らせを伝えるということ。第二イザヤでしばしば用いられる (40:9, 41:27, 52:7)。注目すべきことに、これらはいずれもシオン (エルサレム) を対象とした表現である。
- 7) 「繋がれた人々に解放を (告げる)」は LXX では「目の見えない人々に視力の回復を告げる」と訳される。この LXX をルカ 4 章 18 節が引用したことは間違いない。LXX はヘブライ語 אסורים 「繋がれた人々」を סורים 「目の見えない人々」と読んだ可能性があり (HAL 74. 662), また, פקח-קח 「解放」をイザ 42 章 7 節との関連で פקח 「開くこと」と読んだと予想される (GK§84bn)。Vgl. J. W. Watts, Isaiah 34-66 (WBC 25), 1987, 500.
- 8) 「恵みの年」がいわゆるヨベルの年を指しているかどうかは、文脈からは判然としない。
- 9) 「神による報いの日」は「ヤハウエによる恵みの年」とパラレルである。ヘブライ語 נקם はしばしば「報復」と訳されるが、この 2 節にはパラレリズムがある以上、復讐というニュアンスは全くなく、むしろ報いや慰めを意味することを説明する。実際、イザヤ 63:4 でも「報復」は「贖い」に対応している (34:8, 35:4, 40:9 も参照)。Vgl. G. Sauer, Art. נקם, in: THAT II, 1984, 108.

- 10) 「その栄光をわが物とする」は、直訳すれば「あなたがたは彼らの栄光と交換する」。
- 11) BHS を参照。この訳については、あとで論じる。
- 12) この鍵括弧についてはあとで論じる。
- 13) 「かぶる」と訳した動詞 כִּתְּבַּע (ピエル形) は本来的には「祭司の務めをはたす」という意味。BDB, 464. この表現は 6 節の「ヤハウエの祭司たち」と関連を有する。
- 14) C. ヴェスターマン, 前掲書, 621 頁。なお, これはフォルツの見解の踏襲である。Vgl. P. Volz, *Jesaja II* (KAT Bd. IX), 1932, 253f.
- 15) C. ヴェスターマン, 前掲書, 619 頁以下。
- 16) G. Fohrer, *Das Buch Jesaja, Kapitel 40-66* (ZB), 1964, 234 もまた同様に 10 節と 11 節の入れ替えを提案している。
- 17) C. ヴェスターマン, 前掲書, 619 頁。
- 18) 例えば, C. ヴェスターマン, 前掲書, 612-618 頁。また関根清三氏も 61 章 1-3 節の統一性を前提にしている。関根清三「第三イザヤの編年体的解釈」, 『聖書学論集 21』, 1987, 23-54 頁。
- 19) P. Höffken, *Das Buch Jesaja, Kapitel 40-66* (NSKAT), 1998, 218; W. Brueggemann, *Isaiah 40-66* (Westminster Bible Companion), 1998, 212 も 1-4 節をひとまとまりと見る。
- 20) 関根正雄訳『旧約聖書』, 1997, 903 頁は 8-9 節を括弧でくくり, 引用文として理解する。
- 21) 同上, 903 頁。C. ヴェスターマン, 前掲書, 619 頁も同じ。
- 22) 大島力「イザヤ書 40-66 章」, 『新共同訳旧約聖書略解』, 2001, 808 頁。
- 23) H. W. Robinson, "The Council of Yahweh", in: JTS 45 (1944), 151-157; E. Th. Mullen, "Divine Assembly", in: ABD 2, 1992, 214-217. 北博「天上の会議の表象と預言者意識」, 金井・月本・山我編『古代イスラエル預言者の思想的世界』, 1997, 106-125 頁。
- 24) 代表的な箇所は列王記上 22 章 19-28 節。そこでは, 預言者ミカヤがヤハウエの議会に参加し, そこで決定された言葉の使者(伝達者)として発言している。「ヤハウエの議会」という概念はエレミヤ 23 章 18 節に現れる(「誰がヤハウエの議会に立ち, また, その言葉を見聞きしたか」)。クロスによれば, 「ヤハウエの議会」はカナン神話に由来するものと説明される。F. M. クロス(興石訳)『カナン神話とヘブライ叙事詩』, 1997, 241 頁。

- 25) F.M.クロス, 前掲書, 241-242 頁。
- 26) イザヤ 40 章 1-8 節, 48 章 20-21 節, 52 章 7-10 節, 57 章 14 節, 62 章 10-12 節。Vgl. F. M. Cross, "The Council of Yahweh in Second Isaiah", in: JNES 12, 1953, 274-277.
- 27) F.M.クロス, 前掲書, 242 頁。G.フォン・ラート (荒井訳)『旧約聖書神学 II』, 1982, 325-326 頁も同様。ただし, J.ブレンキンソップ (樋口訳)『旧約預言の歴史』, 1997, 267 頁は「ヤハウエの議会」について批判的に扱う。左近淑 (高柳訳)「イザヤ書 40 章 1-11 節の修辞批判的研究」,『左近淑著作集第一巻』, 1992, 254 頁をも参照。
- 28) R. Rendtorff, „Jesaja 6 im Rahmen der Komposition des Jesajabuches“, Kanon und Theologie, 1991, 168-170.
- 29) 北博「黙示文学」,『現代聖書講座第二巻』, 1996, 192-193 頁。北氏は「ヤハウエの議会」が後期預言文学において黙示的表象へと発展したと見ている。しかし, それが第三イザヤにあてはまるかどうか確かではない。
- 30) 61 章 10-11 節でも預言者 (一人称) は自らをイスラエルと同一視している。
- 31) J.ブレンキンソップ, 前掲書, 268 頁は第三イザヤの人称の交替現象を一種の祭儀的ドラマとして見ている。Vgl. K. Baltzer, Deutero-Jesaja (KAT), 1999, 29ff.
- 32) C.ヴェスターマン, 前掲書, 617 頁。ヴェスターマンは第三イザヤが不特定の大衆に語りかけていると見ている。
- 33) 3 節の「福音を伝える」もエルサレムに関連した表現と認識できる。注 4) を見よ。
- 34) U. Berger, Das Buch Jesaja (HBS), 1998, 446.
- 35) 「永遠の契約」は祭司文書に特徴的な概念である。ノア契約 (創世記 9 章 16 節) とアブラハム契約 (17 章 7 節) に見られるが, 本質的には神殿崩壊を経験したイスラエルの民に向けられた契約として解釈が可能である。左近淑 (大住編)『旧約聖書緒論講義』, 1995, 199-201 頁。
- 36) 関根清三, 前掲書, 30 頁。
- 37) エズラ記 3 章 12-13 節では神殿の基礎が据えられた時, 人々が「大声をあげて泣き, また多くの者が喜びの声をあげた」と書き記す。神殿の再建はイスラエルの民にとっては唯一の望みであった。
- 38) この 2 節で用いられるヘブライ語 נָחַם「慰める」(ピエル形) は 51 章 3 節にも現れる。注目すべきことに, そこでは「廃墟」を「慰める」という表現で用いられ, 神殿の再建を意味している。従って, この 61 章 2 節の「悲しむ人々を慰

める」も神殿再建を意味することは疑いない（52 章 9 節をも参照）。H. J. Fabry, Art. בְּנֵי , in: TDOT IX, 1998, 351.

- 39) K. Koenen, Ethik und Eschatologie im Tritojesajabuch, 1990 (WMANT62), 215f. コエネンは第三イザヤの成立を紀元前 520 ～ 515 年に見ている。
- 40) エルサレム神殿の再建は最終的に城壁の奉献によって完了する（ネヘミヤ 12 章 43 節）。
- 41) C. ヴェスターマン（左近・大野訳）『聖書の基礎知識・旧約編』, 1984, 176-177 頁。なお, C. ヴェスターマン（頓所・山本訳）『イザヤ書 40-66 章』, 616-618 頁ではこれについて編集史的な考察がなされる。
- 42) H. W. Jüngling, Das Buch Jesaja, in: E. Zenger (Hrsg.), Einleitung in das Alte Testament, 1998, 392.
- 43) A. J. Tomasino, “Isaiah 1, 1-2, 4 and 63-66, and the Composition of the Isaianic Corpus, JSOT 57 (1993), 81-98 (特に 92-93)。
- 44) R. Rendtorff, „Zur Komposition des Buches Jesaja“, VT 34 (1984), 305f.
- 45) イザヤ書 19 章 19-25 節, 56 章 3-8 節。
- 46) イザヤ書 1 章 11-17 節。
- 47) クレメンツはこのことを指摘している。R. E. クレメンツ（飛鳥井訳）「イザヤ書の統一性」, 『インタープリテーション第 15 号』, 1992, 21-23 頁。R. Rendtorff, Theologie des Alten Testaments Bd. 1, 1999, 184.
- 48) 越後屋朗「イザヤ書の現在」, 『基督教研究』, 1994, 18-37 頁。越後屋氏は最近のイザヤ書研究の傾向を紹介し, イザヤ書全体の最終形態を尊重する読み方を提案している。